

翔

TOBU

No 33

30 XI, 1982

百万石蝶談会

HYAKUMANGOKU-TYÖDANKAI

キバネセセリ幼虫採集法

松井 正人

1982年6月6日、白峰村白山釈迦道にて、ハリギリよりキバネセセリ幼虫が採集できた方法を披露する。この方法では、ハリギリ2本より、終令を含めて7羽を採集した。が、当方に損害はなかった。

白山釈迦道には、膝丈から大木に至るまでのハリギリが数多くあるが、あまり小さな木はほとんど見込がない。また、大木であっても調べることができないので、高さ5~10mの木に的を絞ることにした。

まず、目当たりの良い、とびだした感じのハリギリに目を付け、巣か食痕を捜す。巣も食痕も枝先の方であって、下から見上げていると葉が幾重にも重なってわかりづらいが、少しでもそれらしい形跡があれば、次の行動に移る。

ハリギリには、その名の通り おそろしいトゲがあるので簡単には登れない。そこで、まず軍手を二重にはめ、10m位のロープをくねえ木にぶらさがれる様な恰好で登る。(イヌヤモリの様な感じだが、素早く登る。)

木が折れない程度に高く登ると、木がしなってくるので、片手両足で木にぶらさがり、残りの片手でロープを木に縛りつける。(ロープの先にカギツメでも付けていると最良で、調べた後、再度、木に登らなくてよい。) この行動が一番疲れる。

木から降りて、少し休んだ後、残ったロープの端をひっぱり強引にハリギリを曲げる。登っている時は簡単に曲がった木でも、いざ、こうやって曲げるとなかなか曲らない。ロープにフックを作っておくと手が滑らず比較的曲げ易い。

手が届く様な所まで曲がったならば、ロープを別の木にくくり付ける。やっと、幼虫を捜すことができる。

巣や食痕は枝先の方にあるので、その付近を良く捜すと巣が見つかり、幼虫が中に入っている。幼虫が入っていない時は、更に別の巣を捜せば、幼虫はきっと、待ちくたびしているだろう。

立山川でイワオウギより得られたヒメシジミ幼虫の一考察

吉村 久貴

1982年5月23日、6月6日の二度にわたり、富山県中新川郡上市町馬場島の立山川岸、標高1,000~1,100m地点において、ヒメシジミ幼虫を採集確認したので報告する。

富山県の昆虫(1979)によると、ヒメシジミは富山県内では立山山麓に点々と広く分布しており、筆者の知る限りでも、有峰湖畔、立山温泉付近、称名谷飛竜橋付近で成虫を確認している。(いずれも富山県中新川郡、中新川郡)

また、1979年の本会諸兄との「早月川源流アサマシジミ調査行」の折にも野中・松井・諸道氏により、白萩川・ブナグラ谷より、イワオウギ・イタドリなどを食するヒメシジミが採集されたことは、本誌No.24「アサマシジミ特集号」(1981)にも記載されている。

本年、ヒメシジミの確認された地点は、ブナグラ谷とは谷を隔てた立山川岸であり、両地点は2km程の隔りがあるが、余白より連なる早月尾根により確実に分断されている。

5月23日の確認地点は、アサマシジミ、クモマツマキチョウなどが生息する緩やかながしめ斜面で、ボソソと点在するイワオウギより、黒あずき色の幼虫1頭を採集した。当日は、本会の松井・若下氏も同行しており、イワオウギからは、アサマシジミ幼虫も同時に20頭ばかり採集した。

ところが、このヒメシジミと考えられる黒あずき色の幼虫は、現地のイワオウギで飼育はしたが、他のアサマシジミ幼虫といっしょに飼ったために、どの個体となったかはわからず、羽化した成虫の姿はもちろん、早の中にもヒメシジミと思われけるものはいなかった。

ここで、ヒメシジミではなかったのか? という疑問が生まれた。

6月6日には、金沢大学薬学部のW嬢と共に、立山川に入った。5月23日には、雪渓の下となっていたところの数株のイワオウギより、ヒメシジミと思われける幼虫6頭が、49数のアサマシジミ幼虫と共に採集された。

この6頭については、アサマシジミと分離して現地のイワオウギで飼育したところ、7月4日に1♂2♀♀、同6日に1♂2♀♀のヒメシジミが羽化した。アサマシジミに比べると、ヒメシジミは成長し蛹化・羽化する速度が遅い様に感じられた。

アサマシジミには黒っぽい幼虫はいないのかと思われけるわけだが、筆者としては、5月23日採集の1頭について、アサマシジミである可能性が簡単には捨てられない。その理由として、更に次の様な事実があげられる。

1) 筆者がヒメシジミを飼育中に気付いたことであるが、ヒメシジミは赤い色素成分をもったフンをする。(このことについては、立山川産の他に新潟県糸魚川市白高地沢産のヒメシジミにおいても観察されている。) 5月23日採集の幼虫は赤い色の混ったフンをしなかったこと。

2) 1978年に、橋場 清氏により、高山県上新川郡常願寺川上流湯川谷でイワオウギより採集された50を越える多数のアサマシジミ幼虫の中にも2〜3頭の黒っぽい幼虫がいたが、緑色の確実なアサマシジミと思われる幼虫と分けて飼育しなかったため、すべてがアサマシジミと同定できる成虫となったこと。(未発表)

これらの事実より、黒っぽいアサマシジミの幼虫もこの世にはいるのではないかと思う次第である。

今後、アサマシジミ幼虫に混じって、ヒメシジミ幼虫と思われる幼虫を見つけた時には、こまめに採集し、アサマシジミ幼虫と分けて飼育し、確実にヒメシジミの成虫の羽化が見られれば、筆者の思い込みも真実によって、打ち破られようかと思う。会員諸氏の協力をお願いしたい。

— 追記 —

なお、本年(1982)、新潟県糸魚川市白高地沢にて採集した黒っぽい幼虫9頭は、すべてヒメシジミであり、6♂3♀が羽化した。

参考文献

高山県の昆虫 (1979) p. 311
アサマシジミ特集号 報 No. 24 (1981) p. 7

—— 兵馬平(へいおのだいら)でアサマシジミを確認 ——

吉村 久貴

1982年6月13日、新潟県糸魚川市兵馬平において、エビラフジよりアサマシジミ幼虫を確認したので報告する。

蓮華温泉より、朝日岳に至る登山道は、以前は兵馬平経由と別の道があって、瀬戸川のモッコ渡しのところで合流して一本になっていたが、1981年より、瀬戸川のモッコが廃止されると同時に、モッコ渡し点より下流に鉄筋の橋が作られた。これにより、登山道は兵馬平で分岐し、鉄橋を渡ってから以前の道に合流する様に変更

された。

本年(1982)6月13日、松井正人氏
と共に、白高地沢を目指
して、矢馬平を歩い

ていた際に、登山道の分岐点付近で、食痕のたくさんついたエビラフジを発見した。

さつとく、2人で食痕の主を捜したところ、簡単にアサマシジミ幼虫が見つかった。

食痕の割には、幼虫が少なく、4頭を得ただけであったが、白高地沢産のイフオウギで飼育したところ、

オウギで飼育したところ、

6/29に1♂、6/30に1♂、7/6に2♀が羽化した。

矢馬平は、アサマシジミの産卵することによって有名な白高地沢や雪倉岳山麓より数kmしか離れていないが、イフオウギ、タイツリオウギではなくエビラフジを食していたことより変異が期待されたが、イフオウギ食いの白高地沢産のものと何ら変わるものがない、成虫個体であった。

エビラフジを食していたものに、急にイフオウギを与えたせいか、心もち小さな成虫の様な気がするが-----。

白高地沢産アサマシジミの斑紋異常例

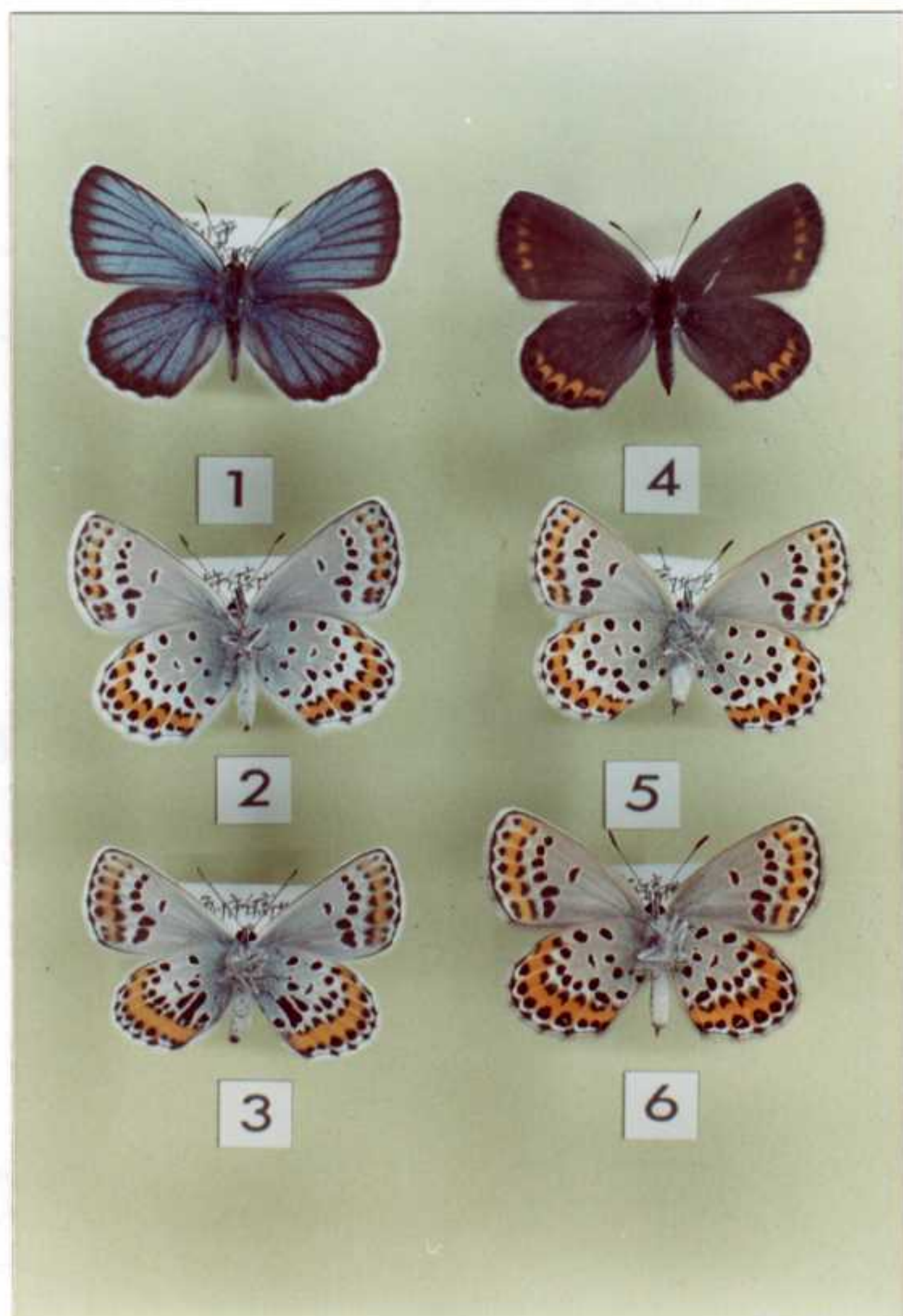
吉村 久貴

1982年6月13日、新潟県糸魚川市白高地沢より持ち帰った約100頭のアサマシジミ幼虫より、写真に示す様な、斑紋異常をもつ個体が発見したので報告する。

写真の No. 3 は、1982. 7. 21 に羽化した雄の裏面であるが、後翅裏

面の黒斑が発達し、異常な模様が表われている。また赤橙色帯も正常なものに比べると太い。

No. 1 と No. 2 は、それぞれ同一産地（糸魚川市白高地沢）の、標準的な雄の翅表と翅裏面である。



写真の標本はすべて、糸魚川市白高地沢産、すべて筆者保管である。

1. 1982. 6. 30 羽化

2. " 7. 1 "

3. " 7. 2 "

4. " 7. 1 "

5. " 7. 1 "

6. " 7. 2 "

写真の No. 6 は、1982. 7. 2 に羽化した雌の裏面であるが、赤橙色帯が異常に太い。

No. 4 と No. 5 は、それぞれ同一産地の標準的な雌の翅表と翅裏面である。

なお、撮影には、ニコン F3, ニッコールレンズ 105mm F2.5 を用い、フィルムはサクラカラー II (ASA 100) を用いた。

1982年ゼフィルス採幼の記録

野中 勝

ゼフの採卵の難さが、欲深な心で寒風の中、木にしがみつくとノングリーな面にあるとしたら、あふれる緑の中でかわいいワラジ虫を捜す採幼には、収穫を度外視した優雅な楽しみがあると言えるだろう。今年も二度採幼に出かけたので以下にその記録を記す。

1) 1982年5月9日 石川県金沢市医王山

ウラキシジミ 終令 15羽 マルバオタモリ

本種は毎年同一樹に産卵する傾向が強く、例年卵を得ている重山道路分岐付近の数本の樹を捜したところ、簡単に幼虫を発見できた。食痕を発見することがポイントで、幼虫は主に葉、葉柄などに静止しており、卵塊で産まれるためか、数匹づつまとまって得られた。上記のうち、2例しいずれも終令のみは、卵殻を確認しようとした際に樹幹に静止しているのを発見したものであるが、一体、何をしていたのであろうか？

2) 1982年5月16日

富山県西砺波郡ツノオ峠 (標高 500m 位)

ウスアカミドリシジミ	終令	2羽	キンマメザクラ
ダイセンシジミ	"	2羽	ミズナラ
アカシジミ	"	1羽	ミズナラ
ウラナミアカシジミ	"	1羽	コナラ
ミズハロオナガシジミ	"	1羽	ミズナラ

ウスアカミドリシジミを主に捜したが、ガケから道路にはり出した樹から2羽得られたのみだった。他は全てたたき網で採集した。この他、峠付近のイボタから真新しいウラエマダラシジミの脱出殻3個を確認。ウスバシロキョウ1羽、スギタニルシジミ1羽も採集した。

ウスアカミドリシジミ幼虫のクヌギでの一飼育例

吉村 久貴

本年(1982)、アイミドリシジミ・ジョウザンミドリシジミ幼に混じって、ウスアカミドリシジミ幼虫を、クヌギで終令まで飼育したので報告する。

野中 勝氏に於、1981年11月24日に白峰村赤谷で採卵された Zeph

卵3種(メアカ・マイ・ジョウザン)を飼育依頼され、今春、目で見てもアカミドリシジミ組とマイ・ジョウザンミドリシジミ組に分け、メアカミドリシジミはソメイヨシノで、マイ・ジョウザンミドリシジミ組は時期を遅らせてクヌギで飼育を開始した。

マイ・ジョウザンミドリシジミ組に混じり、メアカミドリシジミの存在に気付いたのは、メアカミドリシジミが3令になった時点であったので、詳しい飼育経過は記録していない。

終令になったメアカミドリシジミ幼虫は、うすたお色をしていて、前蛹になる直前でもソメイヨシノの葉を食したものよりやや小さく、食欲もよくない様だった。その後、前蛹になったが、脱皮の際にシャーレのフタより落下したために、体が割れてしまい、残念なことに成虫になるまでにはいたらなかった。

なお、保育社の原色日本昆虫生態図鑑Ⅲ 4巻編に次の様なメアカミドリシジミ幼虫をクヌギで飼育した例があったので付記しておく。また、筆者が、クヌギで飼育したメアカミドリシジミ幼虫は、著しく緑色味を帯びることはなかった。

原色日本昆虫生態図鑑Ⅲ 4巻編 白水 隆監修
7名共著 保育社(1972)

p.170 自然状態の食樹以外でのミドリシジミ類4種の飼育例
(1962)

2. メアカミドリシジミ

孵化 1眠起 2令
3/27 4/5 4/12

死亡 5/15

産地
京都市貴船

2令までの摂食は、サクラ類を与えたものと変わりなく摂食は良好。しかし、体色は著しく緑色味を帯びる。5/9(3令)で体長約13mm。

フジミドリ雌成虫卵の採卵例

松田 俊郎

6月27日(日)、前回の収穫に気を良くして、フジミドリをねらい午後からまた、医王山へ出かけた。

前回は雄しか採れなかったが、今度は雌が採れた。採れたのは、養父峠付近で、フジミドリ5雄2雌を得ることができた。

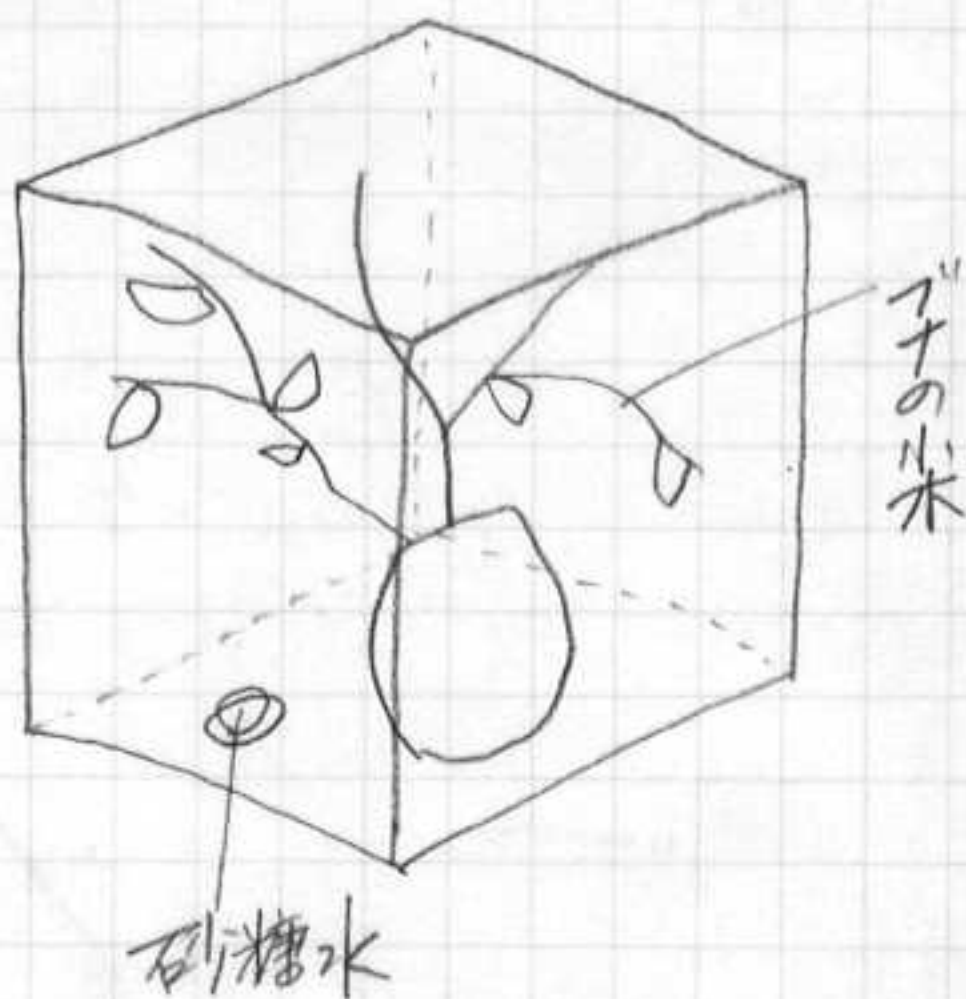
すでに雄は、破損しかけていたが、雌は完品であった。もしかしたら、この雌から採卵できるかもしれないと思い、雌を生かしたまま持ち帰った。

装置は右図のように人形ケースの中の花びんにブナの小木をさしただけの非常に簡単なものである。

この中に2匹の雌を放し飼いにし、日の当たらない部屋の隅に置いた。あまり期待はしていなかったのだが、条件が良かったのか6月28日から7月3日にかけて計40卵を産んだ。

7月2日に1雌、3日にもう1匹の雌が死亡したが、この時、部屋の温度計は30度を超えていた。おそらく、ケースの中はもっと温度が高くなっていたと思われる。

また、この2匹の雌は、裏面の白帯の巾が多少異なっていたので区別でき、2匹とも産卵したことは確実である。



医王山にてツマジロウラジャノメを採集

嵯峨井 淳郎

金沢周辺にて採集例の少ないツマジロウラジャノメを、医王山にて採集したので記録しておく。

1982-VII-3 は 金沢市医王山
当日、フジミドリ雌を求めて菱広峠へ登った帰途、食餌植物とみられる1ガリヤスを発見し、『医王山にもツマジロウラジャノメが産するかもしれない』と思いをめぐらしながら歩いているうちに発見採集したものである。

PointからPointを自家用車利用による走りながらの採集が恒例化している昨今、徒歩による採集がいかに重要かを証明したものである。

七尾市徳田でみられたジジミキョウ科2種の記録

吉村 久貴

1982年5月5日、雨で面白くなかったゴールデン・ウィークのしめくくりも、用事で七尾市徳田の七尾農業高校へ行くこととなった。その際に徳田の七尾線沿いの農道でツバメジジミ1匹と、ベニジジミ1匹を目撃した。つまらない記録ですが、何かの役に立てばと投稿いたしました。

河内村板尾谷採集記

吉村 久貴

1982年5月9日(日)、筆者の弟と共に恒例の板尾谷“Papilio 採集”に行った。ミヤマカラスアゲハ *P. maackii* は板尾谷だけでも2箱ぐらいあるし、採らないつもりだったが、春型オナガアゲハ *P. macilentus* は、5月20日頃の *maackii* の最盛期に行くとややボロなので、当日は、筆者も *macilentus* に期待をかけていた。

不動滝下の広場に車を止めて歩いて行くと、やや時期が早いせい
か、*bianor* も *maackii* も見当たらず、*xuthus*, *machaon* が吸水して
いる程度。あとはセセリ類とサカハ千千ヨウ(春型)が、せわしなく飛
んでいた。

車より200m程行くと杉林に入るが、杉林の切れ目の明るい斜面が、*macilentus*のポイントだ。*macilentus*が吸水している姿はここでは、ほとんど見たことがない。この斜面は、次から次へと、*macilentus*が飛来する。すべておだ。蝶道となっているらしい。

過去、諸道氏と共に交尾中の *macilentus* 1ペアも確認している。結局、8頭の *macilentus* をネットした。

採集されたものは、次の様なものだった。

オナガアゲハ 8♂♂
ユミスジ 1♂
ユチャバネセセリ 1ex

ミヤマカラスアゲハ 1♂
サカハチチョウ 1♂

TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBU-TOBE.TONDA

《会員の動き・しゃばの動き》

- ◆ 野中・嵯峨井のカラコンビは、8月14日は
夜、前日の石川県初記録のナリキンタバを求
めて、ブラックライト携行による灯火採集を一里野
〜岩間温泉間にて試した。この夜は、バキン
タバを初めとして、県産catocala all star
castという感じで、2人はホクホク。モチロン
ナリキンタバも2頭飛来した。

- ◆ 8月15日(日)~8月16日(月). 中西一家+高平一
家=計9名は、旧盆の休暇を利用して、採集
旅行兼家族旅行とした。岐阜・長野
両県の虫薬を組打屋の積込木が、残念なが
ら大半は雨でネットを振るチャンスは少なか
たが、高山の原山スキー場の有名なPointで
ゴマシジミを20頭前後得られた由。後日
談によれば、ムラサキシジミも得られたようだ。
早朝、木曽の方へ足を延ばし、寿伊谷(井

沢國雄氏宅)でソバを喰って来たというが
なほ多忙を極め、井沢氏とはなかなか話
をかけることもなかったらしい。忙しいとい
うことは大変けつな事だ。

◆ 8月15～17日、松井正人は、剣岳へ。
ネット無関係の本式登山法を勉強中とか。

◆ 8月21日(土)、千刈キチホメは、衆をひき
つれ、岩間へ火燈火採集。少々風が強くカ
ラトは不向きだったが、ヨシ・イマシ・マシ
の各キタバとヨコヤマヒゲナガカサリ・ヤツカミ
ギリ(井村氏によれば果て未記録らしい)が
得られた。目標のナリは姿を見せず。

同日、金沢先生も中宮三ツ又発電所付近にて、
locala採集を行なった。

8月22日(日)

◆ 井村正行会長と嵯峨井は、白山釈迦道に
て板間火燈火採集を行なった。井村氏は前夜
からの撒板麻痺の疲れがこたえて精彩なし。
しかし、井村氏目標とするヨコヤマヒゲナガカサ
リ2匹と嵯峨井目標のナリキタバ(5羽)は
が獲れた。その他、イマシキタバ・エジロ
シタバ・マシキタバ及びオニクワガタ・ミヤマクワ
ガタ等。金沢先生も中宮へ入っていた模様。

◆ 同日、松井・岩下・同陽OBコンビは、釈迦道へ。
アサギマダラ等、どうでもよかったのだ。(笑)

目

次

キバネセセリ幼虫採集法	松井正人	1
立山でイワオウギより得られたヒメジミ幼虫の一考察	吉村久貴	2
兵馬平(いほのだいら)でアサマシジミを確認	吉村久貴	3
白高地沢産アサマシジミの斑紋異常例	吉村久貴	4
1982年ゼフィルス採幼の記録	野中 勝	6
メスマカミドリシジミ幼虫のクマギでの一飼育例	吉村久貴	6
フジミドリ雌成虫よりの採卵例	松田俊郎	7
医王山にてツマジロウラジメノメを採集	嵯峨井孝郎	8
七尾市徳田でみられたシジミチョウ科2種の記録	吉村久貴	8
1982年度採集手記おの1 河内村板尾谷採集記	吉村久貴	9

期 No 33

1982年 11月30日(火)発行

発行： 金沢市三日新町4-9-33. 松井正人氏 百万石蝶談会

校正・編集： 吉村久貴